

# ノーベル賞・本庶さんと共同研究

# 世界が評価 励みに

## 岩手医大・馬場主任教授

# がん治療薬普及及望む

がんの免疫治療薬開発に道を開いた本庶(ほんじょ)京都大特別教授(76)のノーベル賞受賞決定を喜び、共同研究者が本県にいます。1日付で同大医学部准教授から岩手医大医学部産婦人科学講座の主任教授となった馬場(ばば)長さん(44)は神戸市出身です。馬場さんは「長年の研究が世界に認められたのは大変うれしい。基礎研究を続けている日本の研究者も勇気づけられる」と今回の受賞の意義をかみしめる。

馬場さんは、免疫治療薬「オプジーボ」が実用化される以前の2011〜14年、本庶さんらと共に、卵巣がんの患者20人を対象に薬の効果を試験した。当時は京都大医学部付属病院内婦人科の病棟医長で、患者の診療を担当した。本庶さんの薬を実際の患者に使った最初の実験で、患者の腫瘍が小さくなった

り、なくなるなどの効果が出た。これを機に、肺がんや大腸がん治療への活用が進んだ。成果は15年に論文で発表され、馬場さんは本庶さんを含めた21人の共同研究者に名を連ねた。オプジーボは国内で、肺がんや胃がんなど7種類の

がんを対象に使用が承認されているが、卵巣がんはまだ対象となっていない。卵巣がんは年間約1万人の患者がおり、そのうち6割以上が亡くなる病気で、馬場さんは「ノーベル賞受賞の流れに乗って、この薬が国民に広く行き渡るようになればいい」と期待する。馬場さんは同大2年生の時に本庶さんの講義を受けたこともあり、「若々しく熱意のある先生で、若い人を引きつけ、分かりやすい講義だった」と振り返る。一方で、求める水準が高く、研究室に入っても研究を続けられるのはよりすぐりの学生だけだったという。馬場さんは「日本の研究者にとって、自分が研究したことが生きている間に実薬となり、臨床に結びつくというのはなかなかないこと。ノーベル賞受賞が研究者や学生の励みになる」と力を込める。

## 効果不明療法に警鐘

### 専門家「受賞便乗」を懸念

本庶(ほんじょ)京都大特別教授(76)のノーベル医学生理学賞受賞が決まったことで、手術、放射線、抗がん剤に続く第4の治療法「がん免疫療法」に注目が集まる。

「ビス」のウェブサイトで特徴や注意点を解説している。

ただ、免疫療法をうたいながら効果が証明されていないものも多い。専門家は「受賞に便乗し、保険が適用されない自由診療の宣伝が増えても飛びつかないで」と警鐘を鳴らす。

本庶氏が発見したタンパク質「PD1」は、免疫の働きを抑えるブレーキの役割を果たす。ブレーキを解除し、免疫細胞ががん細胞を攻撃できるようにする薬として開発されたのが免疫チェックポイント阻害剤だ。日本ではオプジーボやキイトルーダといった薬が、使用した人としていない人を大規模に比較した臨床試験で効果や安全性を検証し、国の承認を受けた上で保険適用となっている。

効果未証明の治療と免疫チェックポイント阻害剤を併用すると効果があるという事例もあり、勝俣氏は「患者への危険が大きい」と批判。「保険適用になっただけで、主治医や患者会に相談してみしてほしい」と呼び掛ける。



本庶(ほんじょ)さんと免疫治療薬開発の共同研究をした岩手医大の馬場(ばば)長主任教授。「ノーベル賞受賞は多くの研究者らの励みになる」と喜ぶ11月2日、盛岡市・同大

国立がん研究センターも2日、フェイスブックで「根拠のあるもの」とないものがあることを知ってほしい」と呼び掛けた。「がん情報サ

び掛ける。